

MAMIYA CAMERA-PHOTO LIFE SUPPORT



マミヤカメラクラブ

マミヤカメラクラブはマミヤカメラをご愛用の方ならどなたでもご入会いただける写真クラブです。マミヤカメラクラブ会誌 (Mamiya Gallery) の発行 (原則年2回)。プロ写真家による撮影会・勉強会・セミナーの開催。webギャラリーで会員の作品展示。マミヤ製品修理・点検料金の割引等と会員特典もたくさんあります。マミヤカメラに関する情報、会員相互の親睦と写真技術向上をめざし、素晴らしい写真の世界をご堪能ください。



入会費用

入会金 1000円 (税込)
年会費 3000円 (税込) ご入会日より1年間。
※但し2年分の年会費をご入会時にお納めください。

特典

- マミヤカメラクラブ会報 (Mamiya Gallery) の発行。
- クラブ撮影会の開催。
- 勉強会・セミナーの開催。
- ホームページ上に会員作品ギャラリーの開設。
- マミヤ製品修理・点検料金の割引。
- 会員証、オリジナル会員バッジ提供。
- オリジナル会員名刺制作 (有料)。

●製品・修理に関するお問い合わせは、東京サービスセンターへご相談ください。

- 修理をはじめオーバーホール、清掃等を受けます。
- 東京サービスセンターショールームにはマミヤ全機種を展示しています。
- 実際に製品を手にとって操作感や質感を確かめられます。また、選定のアドバイス、操作上の疑問にもお答えしています。

マミヤ・デジタル・イメージング株式会社

東京サービスセンター
〒112-0004 東京都文京区後楽 1-2-2 ココタイラビル 1F
TEL.03-6748-1983 FAX.03-6748-1991
営業時間 9:00~17:50 土、日は休業



マミヤカメラクラブ事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-39-14 ワイズビル 株式会社ワイズクリエイイト内
TEL.03-5689-2776 FAX.03-5689-2786
E-mail :info@mamiya-club.com

- マミヤカメラクラブの入会お申込み等お気軽にお問い合わせください。
- 撮影会・イベントのお申込み・お問い合わせを承ります。
- 下記、ホームページでも詳しくお知らせ致しております。是非ご覧ください。

マミヤカメラクラブホームページ <http://www.mamiya-club.com/>

●株式会社ワイズクリエイイトでは、下記のような業務を行っています。

- ◎マミヤカメラ製品・大中判カメラ販売を致しています。
- ◎撮影アクセサリ、ザックの販売を致しています。
- ◎プロラボ現像・プリントを承ります。
- ◎撮影会・ワークショップ・セミナーを開催しています。

ワイズクリエイイトは写真を通じて人と人、人と自然とのコミュニケーションを確立する事を目的とするフォトオフィスです。
大中判カメラ専門ショップを展開、自然写真家、山岳写真家による写真セミナー、撮影会の開催、写真集の出版、写真レンタル、各種制作業務等、写真に関するソフトとハードあらゆる業務を行います。

www.yscreate.co.jp



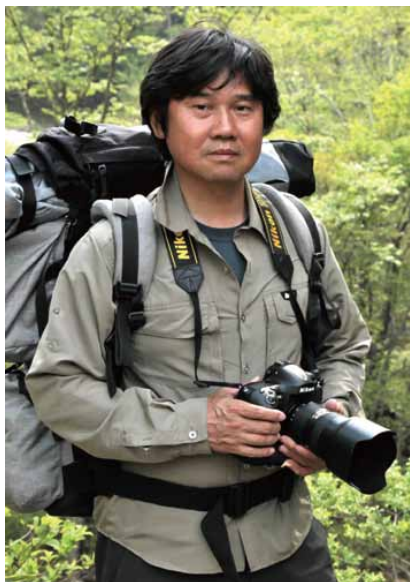
Mamiya Gallery

Mamiya Camera Club 会報誌

Vol.
24
2014

©photo by Tetuo Kikuthi

今号の特集は、写真集「山の星月夜 眠らない日本アルプス」(2008)の出版で山岳写真の新境地を開き、東京都写真美術館の日本の新々作家展「地球の旅人」(2007)等でも大きな話題を提供、更に長野県白馬村和田野に常設の「菊池哲男山岳フォトギャラリー」を展開する、山岳写真家の菊池哲男さんにインタビューを敢行し「写真と山」について熱く語って頂きました。(木戸)



菊池哲男 (きくち てつお)

1961年東京生まれ。立教大学理学部物理学科卒。好きな絵画の影響から14歳から独学で写真を学び、20歳の頃から山岳写真に傾倒する。カメラマン兼ライターとして雑誌の同行取材や作家として撮りためた作品を『山と溪谷』『岳人』等の専門誌やカレンダー、ポストカード等に発表。2001年には月刊誌『山と溪谷』表紙撮影を1年間担当する。1999年写真集『美しき山稜』(アドミックス)、2005年に『白馬SHIROUMA』(山と溪谷社)、2008年『山の星月夜 - 眠らない日本アルプス-』(小学館)そして2011年には『白馬岳 自然の息吹き』(山と溪谷社)を上梓し、東京都写真美術館や松本市美術館、ミュゼふくおかカメラ館などで写真展を開催。

また山岳スキーの分野でもヨーロッパアルプス最高峰モンブランを始め、モンテローザやオートルートそしてカナダ・ロジャースバスなど国内外で約300ルート以上を滑降して取材を行う。著書に『スキーツアー』ほか『バックカントリースキー&スノーボード』(山と溪谷社)、『ハイグレード山スキー』(東京新聞出版局)などがある。その他『日本10名山』(東京新聞出版局)『決定版日本百名山』『日本雪山登山ルート集』『YAMAP 日光・那須・谷川』(ともに山と溪谷社)など共著多数。

現在、新たな写真集出版に向けて撮影を続ける傍ら、4つの写真クラブの顧問を務め、ニコンカレッジ講師を中心に、昨年は明治大学、日本写真芸術専門学校などでも特別講師を務めた。その他アルパインツアーサービス、クラブツーリズム等主催での撮影ツアーでも活躍。フランスのアウトドアカマー・ミレーのテクニカルアドバイザー、東京都写真美術館収蔵作家、日本写真家協会(JPS)会員

Q. カメラとの出会いは?

父親がカメラ好きだった事もあり子供の頃からカメラは身近な存在でした。ですから小学校の速足に6x6cm判の2眼レフを持って行った記憶があります。そもそも小学生のとき天文に興味を持ち、天体望遠鏡で夜空を観察していて写真に撮ってみたい、と思ったのが写真への興味の始まりでした。

確か中学二年生の時、肉眼で見えるような大彗星が来るというので、ぜひ写真に撮りたいという思いから、この時初めてペンタックス K2 と言う一眼レフを購入し本格的に天体写真撮影を開始しました。14才の時ですね。自分で赤外フィルムを現像した事も覚えてます。もちろん写真撮影は天体写真だけでなく、中学・高校では友達のスナップ等も撮って現像・プリントして渡したりしていました。

※印表紙写真は菊池哲男アートフォトギャラリーに隣接する和田野の森教会

インタビュー 山岳写真家・菊池哲男さんに迫る



小運華山よりお花畑と白馬三山

Q. 山への興味は?

高校生の時に山への興味が強くなりました。担任でもあった地学の先生が教育大学山岳部の出身で、よく授業で山の写真を見せられました。1年と2年の夏にはクラスで谷川岳に登ったのが大きく影響しました。大学は立教大学の理学部物理学科に入学しましたが、本当は周囲の反対が無かったら日大芸術学部写真学科にも入りたかったんです。大学では物理の研究はもちろんですが、写真と山岳の両立が出来た時でもあります。

その後、雪山や谷川岳一倉沢、北岳バットレスなど本格的なロッククライミングへとエスカレートしていき、そんな時は、一眼レフは重いので、片手でも撮影出来るコンパクトカメラで撮影していました。また、3年生の時にマッキンリーへの遠征の話を持ち上がり、それではそのトレーニングと言う事で、ヨーロッパアルプスに数ヶ月滞在しモンブランやマッターホルンに登りました。

Q. 山岳写真のデビューは?

学生時代に山岳雑誌の孫請けのようなバイトをしていましたが、その後、『山と溪谷』のモデル兼ライターとして仕事をもらうようになり、ある時、撮りためている山岳写真を編集者に見せたところ、同行取材のカメラマンの仕事も依頼されるようになりました。カメラマンとしてスイスやカナダ、パプアニューギニアなど海外にも行かせてもらいました。



新雪の鹿島槍ヶ岳と晩秋のカラマツ林

Q. 山岳写真家としての活動は？

登山は不思議なものでキャリアを積み積むほど難しい山、難しいスタイルへと発展していきます。一般的な夏のピークハントから雪山やロッククライミング、アイスクライミングなどといった感じです。私は最終的にバックカントリースキー、中でもエキストリームスキーにはまり、南アルプスの北岳バトレス初滑降を始め、いくつかの山に新しいラインを引きました。それが縁でカメラマンとして遠くヨーロッパアルプスやカナディアンロッキーまで山スキーの取材に行きました。これらはその後、ガイドブックとして何冊かにまとめて出版しています。また三脚を立てて撮るような王道的な山岳写真も 20 歳のころから撮影していましたが、1987 年に初めての 6x7cm 判中判カメラを購入し、作品作りに励みました。やがて『山と溪谷』のグラビアやカレンダーにも作品が採用されるようになり、2001 年には『山と溪谷』本誌の表紙写真も 1 年間担当し、すべて 6x7cm 判中判カメラで撮影しました。また 2005 年には同社から写真集も出版しました。その後、2007 年東京都写真美術館で開催された企画展「日本の新進作家展」で 3 名の写真家の一人として選出されたのが大きな転機となりました。

Q. 4つの写真クラブもお持ちになっていますが？

2004 年にニコンと山と溪谷社が共同で「ニコンヤマケイ写真塾」を主宰することになり、私がメイン講師になりました。更に「ニコン塾（現、ニコンカレッジ）」の講師でもあったので、その二つの発展教室として 4 つの写真クラブができました。現在、4 つのクラブ合計で 100 人程の会員がいます。教室では単にカメラの使い方や撮影方法を教えるというよりも、「良い写真を撮りたい」と言うハートの部分に重点を置いて運営しています。良い写真が撮れば、それを見たいと言う人も増えます。ですからその発表の場として定期的にグループ写真展も行っています。そしてその写真展の運営を手伝う形で拘れば、いつかは自分も個展を開きたいと言う気持ちになると思います。100 人いるクラブ員が毎月一回個展を開けたらそれは素晴らしい事です。



雪輝舞う朝の八方尾根



劔岳と残照の夏雲



白馬岳のお花畑より杓子岳と鍾ヶ岳



紅葉するナナカマドと白馬大池

Q. 山岳写真とデジタルカメラについて？

そうですね。撮りたい写真を撮ると言うスタンスからも、早くからデジタルカメラを採用し作品に活かしています。ただ相容れない各々得意とする被写体があって、色合いの良さはフィルムで、私の写真集にもある山の夜景で星や天の川などの暗い被写体を止めるにはデジタルで、と言う様な使い分けです。ですから暫くはフィルムとデジタルを使い分けるつもりです。ママカメラのユーザーはフィルムを使われる方が多いともいますが、前述の微妙な色合いや空気感、質感等の繊細さなどを楽しんでください。そして現像から上がってきた時にフィルムを見て感動する「美しい！」を感じてください。

菊池哲男写真集「山の星月夜」- 眠らない日本アルプス -

日本アルプスを舞台に、月と星を主人公とした、夕方から明け方に至る山の夜の時間帯をテーマとする写真集。日が沈むと同時に星が瞬き、月が煙々と山肌や雲海を照らす。私たちが目にするこの静かな夜の山の姿は、静寂な世界のように不思議な動感があり、意外に“饒舌”なことに驚く。3000m級の山頂から真下に見える、煌めく宝石のような街明かり、キャンプサイトのテントの光、空が白む頃ライトをつけて歩き始める登山客……。夜の山は孤独ではなく人くささえ感じさせる。静寂の中に時の流れが聞こえるようなフォトジェニックな作品を数多く収載。

出版社 小学館
 体裁 大型本 95 ページ
 価格 3400 円 + 税





**菊池哲男
山岳フォトアートギャラリー**

〒399-9301
長野県北安曇郡白馬村和田野
TEL 0261-72-5048

開館 9時～17時 (4月～10月)
10時～16時 (11月～3月)
休館日 水曜日 (7、8月は無休)
(12月～3月は雪の状態も考慮)
入館料
一般 400円
中高生 200円
小学生以下 無料



一瞬の美しさを捉えた感動
透明感と品が命である作品から山の雰囲気や白馬の四季が伝わります。



想像も出来ない表情との出会い
高校生の時に登った白馬岳。以来、四季折々に見せる美しい姿に魅了されて、その感動に今もシャッターを切っています。

Q. プロ写真家として独立され発表の場として常設ギャラリーをお持ちですが？

長野県白馬村の和田野地区に「菊池哲男 山岳フォトアートギャラリー」を展開しています。このギャラリーには北アルプス白馬連峰を約 20 年以上の歳月をかけて撮り続けた作品を展示しています。そもそもこのギャラリーの前身はフランスの人気画家カシニユールの美術館でした。ブームのころは年間 1 万人以上の入場者があったと聞いています。それが時代とともに入場者が減り、直接白馬とも関係がないことから白馬の山々の写真館にしたいと 2007 年、私に依頼がありました。最初は作品をレンタルするという形でしたが、ブームが去って経営が厳しくなり、数年前から同じ敷地内にある和田野の森教会とともに自分で経営しています。この教会は日本聖公会の教会として生まれたもので、多い時で年間 200 件ほどの結婚式もとり行ってきたそうですが、今はその 1/4 程度でしょうか…。ギャラリーを含めた施設運営は、人件費や管理費なども掛かり大変ですが、自分の写真作品を発信出来て、写真集等の販売もできますのでプラスに考えたいと思います。

2008 年に富士フィルムフォトサロンで写真展『山の星月夜 眠らない日本アルプス』を開催した時は 8000 人もの来場者がありましたが、その一人一人がどの位時間をかけて写真を見ているのかと考えると、決して長い時間ではないと思います。ところが、このギャラリーでは 1 日 10 人の来場者と言う事もあります。皆さんにゆっくりと時間を掛けてじっくり写真を見ていただけるのです。1 時間なんてざらで、「感動した」と芳名帳にたくさんのメッセージを書いてくれています。



モルゲンロートに染まる厳冬の白馬三山

Q. 山岳フォトアートギャラリーの今後は？

自分の作品を 1 年中見て頂く事が出来るのだから素晴らしい場だと思います。また隣接する和田野の森教会では芸術の競演で音楽祭の開催やピアノコンサートを開いたりしています。実はこの音楽祭は 30 年も続いているものを引き継ぎましたが、蒼々たるアーティストが演奏する場としても有名になっています。もちろん教会ですから 12 月にはクリスマスミサなども続けています。写真撮影がもちろん第一ですが、この場所がリゾート地でありながらアートの発信の場として発展する様にも頑張るつもりです。

Q. これからの写真について？

これからも山岳写真家として作品を通して山の魅力を伝えていきたいと思っていますが、日本は山があり、森があり、川があり、岩があり、雪がありで日本の風景は大変素晴らしいと感じます。そんな日本の写真を世界に向けて発信出来たらと思います。また写真と言う芸術作品を、海外の美術館の様に收藏して欲しいと思います。その様な文化継承にお役に立てばと思います。

access

- 菊池哲男山岳フォトアートギャラリー
- 和田野の森教会



和田野の森教会は、石堂とブナ・ナラ・ホウノキといった広葉樹のアーチに囲まれた森のなかにひっそりとたたずみ、優しいぬくもりあふれる、木と石とレンガで作ったクラシカルで静謐な趣をたたえています。どなたにも開かれた教会ですが、大勢の人々の祝福よりも、大切な方たちに囲まれた小さな集まりがふさわしいかもしれません。(和田野の森教会 HP より)



『ずっとマミヤを応援します』



井出多美夫さん

私が、最初に手にしたカメラは一眼レフのデジカメでした。撮影するのが楽しく、無我夢中で毎日シャッターを切ったものです。ところが、『もう少しピントがシャープな写真を撮りたい』または『奥行き感のある写真を撮りたい』など少しずつ私の心境が変わってきはじめてました。思案した結果、フィルムカメラに移行することに決意しマミヤの645を購入することに踏み切ったのです。

まず最初に、洗礼を受けたのがリバーサルフィルムのラチュードの狭さです。いまでは、ラチュードの特性も克服してフィルムカメラのクオリティの高い写真に満足しながら写真ライフを楽しく過ごせております。

近年では、フィルム業界や中判フィルムカメラメーカーも様変わりしてしまいましたが、唯一現行モデルとして645を販売しているマミヤを将来に向かって私は、応援し続けて行こうと思っている今日この頃です。



『間谷の流れ』
栃木県鬼怒原市竜化の滝 平成 25 年 7 月



『岳の春』
群馬県沼田市上川田 平成 25 年 4 月



『氷・牙』
群馬県水上町綾織の滝付近 平成 24 年 2 月



『流れに添う』
群馬県中之条町 平成 23 年 7 月



『雪化粧』
群馬県みどり市不動の滝 平成 26 年 2 月



『暁の燃え』
群馬県伊勢崎市波志江沼 平成 23 年 6 月

マミヤカメラユーザーを訪ねて。

「フィルムカメラで 極める奥行き感」



『瞬 輝』
群馬県吾妻郡浅間大滝 平成 24 年 7 月



井出 多美夫
(いで たみお)

1960 年群馬県生まれ。仕事の傍ら、デジカメ講座の講師を務めながら古今東西、奔走している毎日を送っております。時代の流れでしょうか、お子さんと一緒に受講しているヤングママが増え始めています。すごく楽しみです。若人に将来を託し、クオリティの高い写真を伝承していければと考えております。



『樹 念』
長野県松本市番所大滝 平成 25 年 9 月



『優鶴の杜』
群馬県前橋市栗太郎付近 平成 25 年 7 月



『転生の刻』
栃木県日光市いろは坂 平成 25 年 6 月

石井理康

いけばなと生花写真家を極める。

今号の「この人を訪ねて」は、江戸中期に創始されたいけばなの名門である古流の分派のひとつ、古流松静会の副家元として、多くのお弟子さんを指導する石井理康（いしりこう）さんにスポットを当てたいと思います。「何でいけばなの副家元と写真が関係あるの？」と思われるのですが、実はこの石井理康さんは自身の作品のみならずお弟子さんの作品、更にいけばなの展示会など本格的に写真撮影するプロ写真家でもあるのです。教場1階にある花店の2つの生花専用撮影台にセットされている機材は、各種大判カメラ、デジタルカメラパック、大型ストロボなど正にプロアイテムだらけです。そんな石井理康さんが、いけばなの家元と同時に生花写真家をも目指すのは何故かを追ってみたいと思います。



石井理康（いしりこう）
1972年生まれ。いけばな協会評議員。日本いけばな芸術協会 正会員。帝國華道院評議員。古流松静会 副家元。花の写真の出張撮影や花に関するイベントをプロデュース。

◎古流松静会について・・・。

いけばな・古流の発祥は神田明神です。松静会は文京区の小石川で創設されその後、本郷に移り現在に至ります。父が二代目家元で私が今は副家元ですが、三代目の家元を継ぐこととなります。松静会は一子相伝で私が4才の時から、将来は家元になるから生花道に励めと父に師事して今日に至ります。正直、いけばなの道は厳しく、家元から書物や資料等での教えは無く、全て口伝によるものです。そして、言葉では伝えられない技と心は日々の修行で身につけていくものなのです。本郷本部は家元教場でもあり、お弟子さんは祖父が家元の頃からの方が多くいらっしゃり、人生の先輩の方々です。いろいろとお教えいただくことも多々あります。現家元がとても元気でバリバリと仕事をしておりますので、私が多方面に勉強できるチャンスと日々忙しく頑張っております。

◎何故写真の道に・・・。

花を生けるとどうしても記録用に作品写真を保存しておく必要があります。花は生きもので、いつまでもきれいな状態を保つ事は不可能なのですから。また、展覧会やお弟子さんの発表会にも作品の写真撮影は必ず付いて回ります。以前はプロの写真家に撮影をお願いしていましたが、ちょっと傾いた花を直す時でも写真家は作品にさわりません。直す事の出来るのは花を生けた当事者が師範なのです。ですから撮影の都度立ち会いが必要になります。また、作品を撮影する場合にも、いけばなでは必ず抑えなければならないポイントが幾つかあるのですが、それは通常の写真家の構図造りには当てはまらないものです。そんな状態が続き歯痒く思っていました。写真撮影は子供の時から趣味と言う事もあり、一年奮起「それでは自分で写真を撮ってみよう！」と決意し、15年程前のある写真教室に通い始めました。そこで写真の基礎と応用を学び、いよいよ本格的な撮影を開始致しました。

◎先ず最初は大判カメラでの撮影・・・。

写真教室の先生の勧めもあったのですが、いけばなと言う被写体の性格上、より高精細な表現が出来る事、更には自然な形を再現出来る事などが理由でいきなり大判ビューカメラとスタジオ用ストロボを使った撮影になりました。もちろん大判フィルムを使う必要が無い時はマミヤ RB67 などの中判カメラも使用しました。生けられた花のどの角度からが一番良いカメラアングルなのか？どの様なライティングで一番花が生きているかなどは、4才の時からいけばなをやっている中で問題は無いのですが、問題は撮影技術でした。此の様にしたいと頭の中で描いてもアオリをどのようにするか？ライトの位置は？など試行錯誤しました。それでも10年以上も撮影を続けていれば何とかイメージ通りの写真が撮影出来る様になりました。またフェーズワン、リーフなどの中判デジタルバックも導入して新しい表現方法も模索中です。



古流松静会の本部（教場）は東京大学の南側の春日通りに面した文京区本郷7丁目にあります（写真左）。教場にて実際に生花を指導する石井理康さん（写真右上）。1階には教室で使用される花が所狭しと並んでいます（写真右下）。

写真をキーワードに生の声を聞く。
この人を訪ねて ③

◎プロ写真家としての撮影・・・。

いけばな展、お弟子さんの発表会や大きなイベントの写真撮影を行っています。この場合プロ写真家として撮影料を頂いています。ある意味、いけばなの事が一番分かっている写真家と自負しています。また、宮内庁の仕事や著名人の芸術作品とのコラボ撮影なども行っています。実際の撮影では、いかにして良いものをより良く写せるか、人に喜ばれ、ありがとうと言って頂ける写真を撮りたいと思っています。将来は、いけばな、自分の作った器、光の作り方や当て方などのライティング、全てがオリジナルの作品集を完成させたいと思います。

◎マミヤカメラについて・・・。

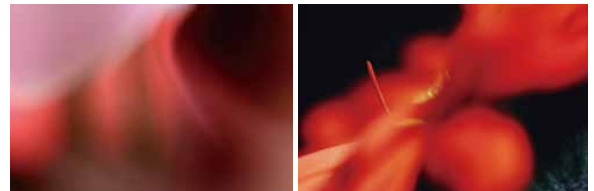
昔からマミヤ RB67 は使っていました。先日も 645AFD+ とリーフの中判デジタルバックの導入をしました。マミヤ RB67 用にフェーズワンデジタルバックを使っていたのですが、デジタルバックの進歩は凄まじく、新しいものにした次第です。ただ、デジタルバックで RAW データで撮影すると、必ずパソコンでの現像と言う作業が付いて回ります。如何に良い機材を使っても、この現像作業がおろそかでは最先端の性能を引き出す事はできません。そこがデジタル撮影の一番の問題点かもしれませんね。しかし、使いこなせばこんなに便利なアイテムはありません。



マミヤカメラに装着された、リーフとフェーズワンデジタルバック。

◎あなたにとって写真とは・・・。

いけばなもそうですが、写真も「今日より明日の方が良い写真を撮影する」と言う気持ちを大事にして生涯をかけて頑張ろうと思っています。いけばなも写真も芸術ですから、どちらも通じるものがあります。ただ、写真家としてポートレートや商品、建築、風景、山岳など他分野の仕事はしないつもりです。いけばなを専門に撮影するプロ写真家として自分を確立して行きたいと思っています。因みに、いけばなと茶の湯を専門に撮影するプロ写真家は関東で数人いらっしゃいますが、花を生けて写真を撮影する写真家は私一人だけだと思います。茶の湯、陶芸、日本料理と勉強していますが、全ていけばなと関連し一体を成すものです。更に精進し、「生花写真家」の道を極めたいと思います。



石井理康さんが生けた作品を撮影した写真（上写真3点）。将来はいけばな、花器、写真と全てがオリジナルの作品をまとめたたいと思います。



発表会等の写真撮影には、カメラだけでなく大型ストロボ等関連機材を持ち込み撮影する。



作品に合わせて大小二つの撮影台を常設。ライティングの重要性からも、ストロボは出力を変え相当数を用意しています。オリジナル撮影台は底部にはストロボをセット。



デジタルカメラバックで撮影した画像は、そのままキャブチャーフソフトで現像処理をします。またフィルムを使ったモノクロ撮影は隣接の暗室にて現像焼き付けも可能。

写真展を裏で支えるパートナー。 株式会社フレームマンに聞く、 額装の極意と展示の勧め。

今号の特集は、私達が写真展会場で目にする写真マット加工などの額装製作や、展示などで活躍するフレームマン社を取り上げたいと思います。どんなに素晴らしい写真展もこの様な裏方の「匠の技」とも言える手助けが無ければ成立しません。そのペールに包まれた全貌を紹介します。また同社独自で写真文化の展開をするフレームマンエキシビションサロン銀座にもスポットを当てたいと思います。



巨大作品の前に集う、フレームマンファミリー。

額装のススメ（写真を作品にするために）

写真を発表したいと思った時の手段としては、写真を飾る、写真展を行う、写真集を作るかなどが考えられます。フレームマン社は写真を「作品」にするのはまぎれもなく額装であると言えます。「餅は餅屋」、良い写真は良い額装で額装をすることが大事なのです。写真の楽しみは撮影やプリントにする事だけではなく、写真を飾る額装・展示と言う事でもあるのです。

額は「買う」ものではなく「創る」もの

写真展開催を、一人で何から何まで計画・実施するには限界があります。作品として写真展会場で発表するものであれば、その作品にあった額装についてアドバイスもしてくれます。既製の額とは違うオリジナリティ溢れる額装はより作品を際立たせる事ができます。

裏打ちこそフレームマンの命

フレームマンの命とする「裏打ち」について、「額装では聞き慣れないかもしれませんが、「経験に裏打ちされた・・・」というように、確実さと信頼を表す言葉として耳にすると思います。フレームマンの裏打ちも、まさに写真に確実さと信頼を提供致します。」と言います。



裏打ちの下準備。匠の手が動く。 大型作品の前で、大野尚先生と奈須田社長。



大型ローラー機に通して裏打ちを行う。

裏打ちとは写真にコシをもたせ、しっかりさせるものです。フレームマン社では「写真の平面性」に拘り、素材もゲータボード、アルポリック、フォトアクリル等々、様々なものを選択することができますが、その中でも薄さと平面性において究極とも思える素材、ならびにその製作方法を同社で開発しているのがFM プレートだそう。FM とはフレームマンの略称で、社名を冠するこの素材は薄さわずか 0.8 ミリのアルミの無垢板に極薄のロールシート材を使ってローラー機によって圧着します。その効果は絶大で他とは比べる事のできないクオリティです。特にクリスタルプリントが本来の特性を保ったまま、展示することができるのも特筆すべき事です。

『写真はやはり、弛んではかっこ悪いんです。ピシッと背筋の伸びた、シャーンとした物のほうがじっくり見ることが出来ます。どんなに立派なスーツを着ても、猫背では・・・裏打ちをすることは、写真の背筋を伸ばしてあげるようなものです。この基本的なことをしっかりと行うことが、額装の一步となるのです。』と言います。フレームマン社がこの点に拘るのも当然ですね。



大型作品の搬出風景。 制作スタッフの土気も高い。



FM プレートに木製ゲタをつける。

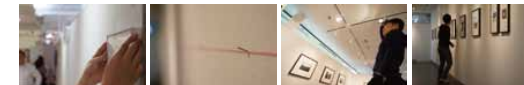
また、額装という装丁は、何も額縁に入れて飾るだけではないとも言います。『写真をストレートに見せたい場合は額縁に入れず展示することができます。裏打ちした素材であれば後ろにゲタを付けて、壁から浮かして飾ることが可能です。写真をそのまま壁に貼ってしまうと、ポスターのように見えてしまうこともあります。壁から浮かすことで存在感を示し、非常にシャープに作品を引き立たせます。しかも、このゲタをあえて木製で制作。高さの調整や細工加工も容易で、釘で引っ掛けることも、ワイヤーで吊るすことも簡単です。』写真の見せ方を熟知しているからこそこのアイディアがかもしれません。

裏方だから出来るギャラリーが銀座にあります。

そんな裏方としての立場であったフレームマン社が銀座にギャラリーを構えています。フレームマンエキシビションサロン銀座と銘打ち、これまでの技術と経験が活かされた、ギャラリーⅠ・ギャラリーⅡ・ミニギャラリー・ショールームから構成されています。プロの写真家はもとより、「広く写真愛好家の皆様に、気軽に展示を楽しんで頂きたい」とつくられたこのサロンは、フレームマン社のクオリティを体験することができます。写真展を開催する事は仲間との交流を深め、創作意欲を高める効果のあることを認識させてくれます。



ライティングで表情が変わる。上がスポットライト、下が色調偏用蛍光灯。



クオリティの高い展示作業。

まずは展示の醍醐味を。お手軽な各種スペシャルプライスプラン

フレームマン・ギンザ・サロンでは、各種パッケージプランが用意されています。展示には様々な費用が掛かるものですが、それらをまとめて従来では考えられない価格で提供しています。気軽に写真展を開催して貰いたいという思いで考えられた3種のプランは大変魅力的なものです。



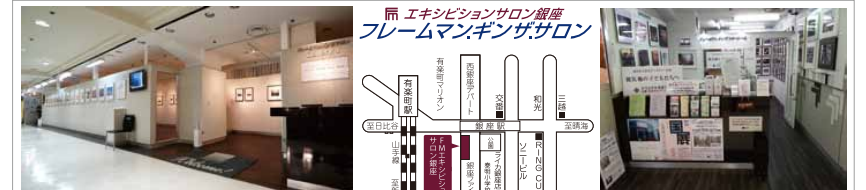
プランAでの展示例。

ギャラリーフロムナード壁面に 15 枚の作品を飾ることが出来るミニギャラリープランは一週間で ¥30,000 (税込)。15 枚という組写真より多く、自分のテーマや写真集制作に向けた方向性を確認するのに丁度良い枚数かもしれません。

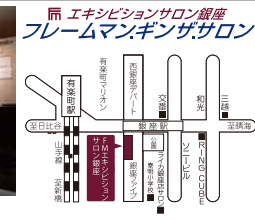
ギャラリーⅡを利用して30枚飾るプランはAプラン(裏打ちなし)¥150,000(税込)とBプラン(裏打ちあり) ¥200,000 (税込) という2つのプランを提供しています。

どのプランも写真を用意すれば、会場費用はもちろん作品加工費、展示設営費等の諸費用が含まれたオールインワンの価格です。個人で作品の方向性を確かめたり、気の合う仲間と作品を持ち寄って費用をシェアしたりと、フレームマンクオリティの質の高い写真展開催を実現できるのです。

作品制作と展示作業、共に写真家にとって重要なポイント。作家と作品のために力強いパートナーになります。



リニューアル記念展 岡嶋和幸写真展 Stray in a mist.



フレームマンギンザショールーム外観



東日本大震災支援企画「被災地の子どもたちへ」

プロ作家のオリジナルプリント額装作品（サイン入り）チャリティー販売開催中！ ¥10,000 より

フレームマン・ギンザ・サロン 〒104-0061 東京都中央区銀座 5-1 銀座ファイブ2F TEL 03-3574-1036

株式会社フレームマン 〒130-0026 東京都墨田区両国 3-10-4 TEL 03-5638-2211 (代)

URL : <http://www.frameman.co.jp> eMail : frameman@frameman.co.jp

ワズクリエイトがお手伝いする 夢の写真集(書籍)出版のおはなし。

マミヤカメラクラブ事務局を務めます、ワズクリエイトでは2007年12月に日本図書管理センターへ出版社申請を行ない「9903972」というISBN出版社記号を取得し、正式に出版社の仲間入りをしました。これによりワズクリエイトの出版する書籍は、世界中において著作権の保護と国内の書籍流通が可能となりました。(書籍の裏表紙に印刷されているバーコードがISBNコードです)ただし、多くの出版社がある中で、最後発の出版社として何らかの特色を持つ必要があります。そこでキーワードを、「大判カメラと銀塩写真」「大判カメラによる写真集」等として、これに特化した書籍を出版して行く事を目的としました。2008年1月には、このコンセプトの書籍第一号「大判カメラマニュアル」を出版しましたが、従来無かったジャンルのため写真関連学校のみならず、一般大学の図書館蔵書、研究機関をはじめプロ、アマ問わず多くの大判カメラユーザーに購読され、出版から6年以上経っても、インターネット書籍販売の最大手「アマゾン」においても、カメラ部門の上位で販売され、カメラ量販店でも販売されています。今後も「大判カメラと銀塩写真」にコンセプトに、大判カメラハウツー本や写真集を積極的に出版して行くつもりです。このコンセプトで「是非私も写真集を出版してみたい」等ありましたら何なりとご相談ください。

《ワズの書籍流通はちょっと違います》

ワズクリエイトでは従来の出版流通である、出版社→書籍取次→書店を見直し(実は最後発の小出版社の書籍を書籍取次が取り扱いません)写真流通を主に発売するつもりです。この流通によりカメラ量販店、カメラ専門店、中古カメラ店等での書籍販売が可能となります。

前述の「大判カメラマニュアル」も、ヨドバシカメラのカメラ売場で平積み状態で販売されてトータル六千冊以上の販売を進行中です。ISBNを取得していますので、書店での販売も可能で、この場合、ワズクリエイト→書店の直接流通となります。もちろん、アマゾンでの販売も可能です。更に詳細を言えば、従来の書籍取次流通は委託方式となりますが、カメラ流通の場合全て買い取り流通となり、返本も限りなくゼロに近いと言えます。



amazonホームページ



ヨドバシカメラホームページ



大判カメラマニュアル



書籍ISBNコード



「大判カメラマニュアル」
著者：木戸嘉一
ムック：164ページ
出版社：ワズクリエイト(2008/1/31)
言語：日本語
ISBN-10: 4990397207
ISBN-13: 978-4990397203
発売日：2008/1/31



「大判カメラ体験記 日本を森を訪ねて」
著者：清水実
ムック：182ページ
出版社：ワズクリエイト(2013/9/8)
言語：日本語
ISBN-10: 4990397215
ISBN-13: 978-4990397210
発売日：2013/9/8

《大判カメラ関連書籍の制作に流れ》

①どの様なコンセプトで写真集出版をしたいのか? ②掲載写真(作品)の枚数? ③体裁? (書籍の大きさ等) ④発行部数? ⑤その他にも写真セレクト時のプロ写真家のアドバイス希望等をまとめてお伝えください。もちろん、予算的な事も踏まえて、いろいろ考慮して見積もりをお出します。因みに、ワズで出版する書籍には全てISBNコードが付加されますので、全国で書籍流通が可能となり、出版と同時に今書籍販売で最も注目されているアマゾンでの販売が可能となります。

下の写真は、昨年出版された清水実さんの「大判カメラ体験記 -日本の森を訪ねて-」の制作過程です。同書は、写真を中心に紹介した従来の写真集の概念を変えて、見開き右頁に大判カメラで撮影した森の写真、左頁に大判カメラ撮影技術と木々の解説等を紹介したもので、写真集+撮影解説書+森の解説書が一体となった書籍で、発売当初から日本各地の新聞にも紹介され大きな話題となりました。



①写真集制作の場合は作品セレクトのお手伝いします。プロの指導も可。



②内容に関しては綿密に打ち合わせ致します。話題になる!売れる!のがgoodです。



③体裁やページ数、印刷方法も決めます。これにより価格が変わります。



④デザイン、割付け等はご希望を聞きながらワズクリエイトで丁寧に行います。



⑤仮出力をして全体の構成や写真イメージも確認します。



⑥さあ校正もしましょう。特に文字組の多い書籍は充分に見る必要があります。



⑦コストは掛かりますが、ドラムスキャナでスキャンして色校正も正確に行います。



⑧大分先が見えてきましたので書籍として認められるISBN申請を行います。



⑨いよいよ、最終校正です。全体の感じや落丁が無いかも確認です。



⑩念願の写真集(書籍)の完成です。本に自分の名前が載るのは格別です。



⑪ご希望の場所に納本します。もちろんワズクリエイトで販売分は預かりします。



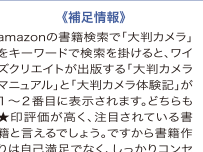
⑫ご希望で出版パーティのお手伝いも、こちらがワズクリエイトの特長です。



⑬プレスリリースもお任せください。この時は日本全国の新聞で紹介されました。



⑭今の時代はネット販売が重要です。アマゾンの登録から販売までお引き受けします。



《補足情報》
amazonの書籍検索で「大判カメラ」をキーワードで検索を掛けると、ワズクリエイトが出版する「大判カメラマニュアル」と「大判カメラ体験記」が1~2番目に表示されます。どちらも★印評価が高く、注目されている書籍と言えるでしょう。ですから書籍作りは自己満足でなく、しっかりコンセプトを捉え内容の良い書籍を出版することに注意したいと思います。

《出版書籍は独自のルートで販売》

ワズで出版された書籍は責任を持って販売にも協力致します。自費出版では制作・発行までは完璧と言えるでしょうが、販売となると疑問視してしまう事例が幾つもあります。それは、今日の書籍取次ぎ制度の問題もありますが、ワズでは独自のカメラ機材販売ルートも活用し、書籍販売のお手伝いを致します。(ただし、内容が良くなくては販売はできません)

大判カメラのすすめ

その4

今回の「大判カメラのすすめ」は、大判カメラならではの特長、ピント面のコントロールアオリを特集したいと思います。デジタルカメラ全盛の時代で、デジタルカメラで撮影した写真を、パソコンアプリケーションを使って大判カメラの形の修整アオリの様に、被写体の「形を修整」することも（問題はありますが）可能な時代になりました。ただ、いくらパソコンを使っても、大判カメラのパンフォーカスアオリの様にピントの無い被写体全てに、パソコンの後処理でピントを出すのはドットをいじらなければならない、相当の時間と労力が掛かり、通常ではほとんど不可能な事です。そこへ行くと、撮影時に簡単なアオリ操作でピント面をコントロールできる大判カメラが、再度注目されているというのも頷けるこの様に感じます。（木戸 嘉一）

《大判カメラのアオリ基本はパンフォーカス写真》

右の2枚の写真をご覧ください。大判カメラをセットし、積み木をテーブルの上に広げ、普通に撮影したのが左の写真です。右の写真は、チルトアオリを使ってパンフォーカス写真に仕上げています。カメラポジションも絞りを変えずに、チルトアオリだけでピント面を変えて撮影できるのが、大判カメラの特長であるピント面コントロールなのです。

《パンフォーカスアオリを逆手にとれば撮影領域が広がる》

前述でもお解りのように、大判カメラではピント面のコントロールを自由自在に使う事ができるのです。ただ、ちょっと待ってください。ピント面を自由に操ることが出来るならば、被写体の一部（直線）にピントを合わせたりする事も可能だと理解してください。下の写真は、ピント面を被写体に対して横にしたり、縦にしたり、斜めにして撮影した作例です。こんな事が簡単にできれば、貴方の撮影領域は大きく広がると思いませんか。そしてそれは人と違う写真を撮影することにもなるのです。



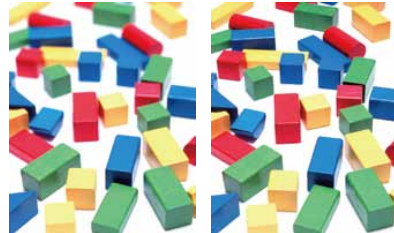
《フロントチルトを起こして被写体の中間のみにピントを合わせる》

カメラ位置より数メートル下がった通路で、大判カメラを俯瞰させて撮影しますが、レンズ部を下に傾けるパンフォーカスにするアオリとは逆に、レンズ部を上には振って撮影すると通路の中間地、横一線にしかピントが合わずに、ちょっと不思議な感じの写真が完成です。



《料理とペリエの斜めのラインにピント面イメージして撮影》

料理写真は通常、全てにピントが合うような配置とアオリを使って撮影しますが、今回は、手前の料理と斜め奥にあるペリエが両主役になるように、料理からペリエにイメージするピント面を引いて、レンズ部を左に振るスイングアオリを使用して撮影。一風変わった料理写真の完成です。



アオリ無しで、手前の積み木にピントを合わせて撮影。 レンズ部をチルトして、パンフォーカスで撮影。



《見下ろす町と林の画面タテにピント面を作り撮影》

手前の林と遠くの町並みを撮影するとどこにでもある普通の写真ですが、画面の中心に仮想の縦線を引き、そこだけにピントを合わせようと、スイングアオリを使用して撮影です。「おやっ？」と思う写真の完成です。



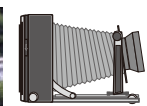
《西伊豆・松崎町の歴史ある岩科学校をアオリをピント面コントロールアオリを使って撮影です》

重要文化財に指定される岩科学校は、なまこ壁をいかした社寺風建築様式とバルコニーなど洋風を取り入れた伊豆地区最古の小学校です。こんな建築物の前に立ったら、大判カメラのアオリを駆使して撮影したいと思うものです。建築写真の基本となる垂直線の整った写真なら、結構多くのカメラマンが撮影しているのではと想像します。そこで、あえて校舎正面からピント面コントロールアオリを使って撮影にチャレンジです。はたしてその結果は・・・？



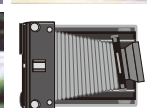
《通常撮影》

まずは、出来るだけ建物の中心の高さになる様にカメラポジションを高くセットアップします。これは、低いカメラポジションから高い建物を見上げて撮影すると、先ずぼまりの写真になってしまうからです。もちろん形の修正アオリを使えば、先ずぼまりは解消しますが、今回は、建物とカメラを平行に構え通常撮影しましたので、建物の垂直線もキレイになり、建物全体と手前の木、全てにピントのあった写真が撮影できました。



《建物上部の横ラインにピントを合わせて撮影》

通常撮影のカメラポジションのままに、レンズ部をチルトアップさせます。この状態でピント合わせを行うと、ピントラインが横ラインになったまま、上から下迄好きなライン位置にピントを調整することが可能になります。今回は、「岩科学校」の看板のある横ラインにピントを合わせ、その上下はぼやかして撮影しました。



《建物の縦ラインにピントを合わせて撮影》

今度は、予めカメラレンズ部をスイングさせて、事前にピントの合うラインを縦線イメージとしておきます。この状態のまま、カメラポジションを多少振って屋根の中心から「岩科学校」の看板、玄関中心の縦ラインにピントが合う様に調整します。これでこのライン以外の左右にピントの無い不思議な写真の完成です。

※黄色のラインはピントの合っている場所を表しています。丸は全体が合っているとご理解ください。またピント面コントロールアオリを使用する場合は絞りは開放で撮影ください。

如何ですか？この様に大判カメラを使えば思い通りのピント面コントロールが出来ます。原理さえ分かれば簡単な技法です。他と違う写真を撮影して楽しみください。またワイズクリエイトでは、定期的大判カメラ教室を開催していますので、興味のある方は是非ご利用ください。

桜咲く 西伊豆・松崎町辺り カメラ片手に散策！

《撮影地紹介》

もう直ぐ桜開花のニュースが伝わってくる季節になります。桜の開花の早い処と言えば有名なのは伊豆半島ですね。特に温暖で「花とロマンの里」と言われる西伊豆・松崎町では2月中旬より様々な種類の桜が開花し、3月下旬頃からは那賀川沿い6kmに、約1200本のソメイヨシノが一斉に開花、4月上旬頃まで楽しめます。また、国指定重要文化財の岩科学校や街の中にもなまこ壁の建物が点在するなど、カメラマンにとって最高の被写体があります。今回はこの西伊豆・松崎町の撮影スポットをご紹介します。



緑のエリア



那賀川沿いの6kmに及ぶ土手には、1200本ものソメイヨシノが植えられています。日本人が大好きな桜と川の景色を満喫してください。開花中には夜のライトアップがありますので夜桜見物も可能です。また、このエリアの52000㎡の田んぼを使った大きな花畑もありますので被写体には困りそうもありません。

黄のエリア



何と言っても明治商家中瀬邸はカメラに収めたい。中瀬邸は明治初期に呉服商家として建てられ、わずか数代のうちに財を成し大地主となり、昭和63年に母屋や土蔵など七棟からなる邸を町が買い取り現在に至ります。中瀬邸に隣接する時計台の天井にも注目。また前を流れる那賀川の川畔も昔の情緒を感じる景色です。

青のエリア



今号の「大判カメラのすすめ」の被写体にもなっている、重要文化財岩科学校は、松崎の町よりちょっと離れた岩科川沿いに立地します。岩科学校は、なまこ壁をいかした社寺風建築様式と、バルコニーなど洋風を取り入れた、伊豆地区最古の小学校として歴史を感じる建物です。建物内の見学では、当時の授業の様子等窺い知る事ができます。近くを散策するとなまこ壁の家屋も見つけることができます。

赤のエリア



漆喰鏡絵で有名な長八美術館があるこのエリアにはなまこ壁の建築物が点在します。観光協会もあり最初に立ち寄って松崎町の情報収集をする事もできます。菜の花の季節には、白と黒のなまこ壁とのマッチングがキレイで是非撮影したい被写体です。近くの浄泉寺は歴史を感じるお寺でじっくりと撮影するのに最適です。

《松崎町についてのお問い合わせは》
松崎町役場企画観光課 TEL0558-42-3964

コマーシャルカメラマンによるポートレート撮影勉強会 撮影指導・石田研二

本格的な大判カメラ、ストロボ、背景布等を使ったポートレート勉強会を開催致します。大中判カメラユーザーでもポートレート撮影をしている人は少ないと思います。今回はコマーシャルカメラマン、写真学校講師として活躍される石田研二さんを講師に向かえて、プロの撮影技術をご教授頂くことになりました。また勉強だけでなく特別企画として、石田研二さん自らが「大判インスタントフィルムを使って、皆様のポートレートを撮影し、専用台紙に入れてプレゼント致します。この機会に是非ご自身のポートレート写真もゲットしませんか？そして勉強後は大中判カメラで奥さん、子供さん、お孫さんなど家族の写真を撮影されたら如何でしょうか。(モデルは参加者の皆さんとなります。)

開催日 2014年4月19日(土) 13時~16時30分
場所 湯島地域活動センター会議室(予定)
参加費 5000円(税込)※台紙入ポートレート写真プレゼント
講師 石田研二(日本写真家協会会員)
主催 ワイズクリエイティブ(マミヤ、リンホフ、ワイズ事務局)
備考 事務局までお申込みください。TEL:03-5689-2776
今回は事務局用意の大判カメラで撮影予定です。



石田研二(いしだけんじ) 京都府出身。大阪芸術大学デザイン学科卒業。写真家の野町和嘉に師事。その後、フリーとなり個展他、グループ展に多数参加し活躍する。日本写真家協会会員、フォトボランティア JAPAN 会員、日本写真芸術専門学校講師、東洋美術学校講師。



(写真左) 石田研二さん撮影によるポートレート。(写真中) 前回開催されたポートレート撮影勉強会の様子。会議室に特設スタジオを設置しますので本格的な撮影が出来ます。また参加者同士でカメラマンとモデルを交代して務め撮影も可能。(写真右) 石田研二さんが参加者の皆さんを大判モクロインスタントフィルムで撮影してプレゼント。これだけでも大変貴重です。フィルム入りのシートホルダーを持参頂ければカラー撮影も可能です。

編集後記

今号の巻頭企画「山岳写真家・菊池哲男さんに迫る！」は如何でしたか？写真家の中でも常設のギャラリーを持っている人はごく僅かです。正直なところ個人でハコモノを持つのは大変な事だと思います。ただ、ご自身の作品発表の場としての目的以外にも、いろいろなお話の詰まったギャラリーなのだと感じました。写真に対する考え方、在り方、デジタルとフィルムについてなど、共感する点は多々ありました。菊池哲男さんの更なる活躍を期待し、微力ながらも何らかの形で応援できたらと思います。また、いけばなの副家元と生花写真家を両立させている石井理康さんにも驚嘆しました。いけばなと写真に対して真摯に取り組んでいる姿が何とも言えません。まだ42才の若さでアイデア一杯詰まった行動力は、これからが楽しみな写真家と言っても過言では無いと思います。

事務局 木戸嘉一